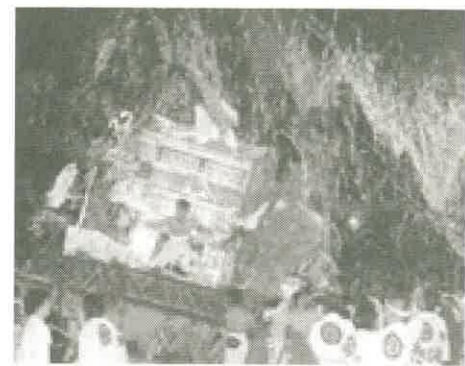


昨年もお伝えしましたが、筑前木屋瀬祇園宿場祭とは、水無月の夏越の祓いする人は千歳の命延ぶと云うなり」と万葉古歌にも歌われるが如く日本伝統の古習であり、当地木屋瀬の産土神・須賀神社でも氏子が茅の輪をくぐり息を吹きかけた人形(ひとかた)を神社に納め、過津日(まがつひ)の邪神を祓い息災を祈願してきた「夏越大祓」の祭礼と、室町時代は永享年間現在の須賀神社の地に祇園社が創建されて以来、五百六十余年の永き歴史を誇る伝統行事「祇園」の祭礼とを昭和三十八年より併せて執行する様になってからの行事名称でございます。本年度は七月の十二・十三日に執行行われます。

祭りの賑いの中心となる山笠は今年も山笠会館運営委員会を中心に制作中ですが、老いも若きもが協力・連携して手作りならではの趣向を凝らした制作が進んでいる様子を窺うにつき、木屋瀬の伝統行事・山笠に注ぐ若者達の暑き思いを心嬉しく感じると共に山笠を通じて今後益々地域の輪が広がる事を思い願う次第です。

さて、そこで、木屋瀬祇園宿場祭の概要をご理解戴き、依り多くの氏子の皆様に親しんで戴く為、今回も紙面をお借りして、祇園宿場祭に関する事など何点かをご説明させていただきます。

〔付録〕
現在の「お汐い取り行事」は、昨年の「寄せ太鼓十五号」で説明致しましたが、その昔、川舟に依る水利交通盛んなりし頃には「お汐い取り」を遠賀川河口の「菅屋」や「洞海湾」で行っていたと口伝にあります。因みに近年でも、木屋瀬伝統文化の振興団体「筑前木瀬茶目気一輪」に依って菅屋の浜で「お汐い取り」が行われ、持ち帰った「お汐い」海砂・海藻を須賀神社社殿手前右に設置された「お汐い台」(弘化四年の寄進)に盛り、氏子の皆様に頒布して居ります。



〔木屋瀬祇園宿場祭の仕組み〕
木屋瀬祇園宿場祭は、例年五月の須賀神社氏子総代会にて其の年の実行委員会が結成され、この実行委員会の主催によって行事の運営(祭事・山笠制作など)が執り行われますが、其の運営費用は、各町内ごとの氏子総代会を通じて集められる氏子の負担金と浄財(寄付金)に依って賄われます。

山笠当番町とは、祭りの間の二日間、山笠の運営を実行委員会より与る訳で、赤山笠(本町六町)は六年に一回、青山笠(新町六町)は

ファンが急増中
「こやのせ座」能

去る3月2日(日)、こやのせ座能舞台にて、恒例の能・親子お能教室が執り行われました。今年も、仕事「二人静」「山姥」、能「経正」が上演されました。お能教室には四十三人の親子が参加され、鑑賞くださいました。



写真上：お能教室の様子
写真右：能講演の様子

寄せ太鼓

北九州市立長崎街道木屋瀬宿記念館 運営協議会 広報部
北九州市八幡西区木屋瀬三丁目16番26号 (〒807-1261)
TEL 093-619-1149 FAX 093-617-4949

七年に一回の輪番制で各町内に山笠当番町が回ってきます。山笠当番が与る山笠運営は主たる内容は、二日間に渡る山笠の町内運行や、百〜二百名にのぼる山笠関係者の飲食接待などで、其の費用は実行委員会からの助成金や赤山笠・青山笠町内からの負担金・祝儀などで賄われ不足分は当番町が負担します。

尚「お汐い」の持ち帰り用に社号・社紋が入り福笹のついた手作り「お汐い桶」並びに須賀神社の社号と祇園社の社紋入りの「木札お守り」を各五百円で各種お守りと共に神社社務所で祭りの二日間販売致しますのでご利用戴ければと存じます。

今回は以上の事柄を紹介し説明致しましたが、本年度祇園宿場祭の執行にあたり、実行委員会本部はもとより、本年度一番山笠当番町(感田町)・二番山笠当番町(新地町)両総取締役以下山笠関係者一同、木屋瀬祇園の歴史と伝統の重みを踏まえ、厳肅なる規律を以って盛大且つ勇壮に執行行方所存でございますので、氏子の皆様方にも、ご協力の程、何卒、宜しくお願い申し上げます。

総会無事終了
平成二十年四月二十五日、こやのせ座におきまして、第8回北九州市立長崎街道木屋瀬宿記念館運営協議会総会が開かれました。

平成十九年度事業報告・決算報告・平成二十年事業計画案・予算案が議案として審議され、すべて承認されました。

役員紹介
理事 長：高宮 歳継
副理事 長：水上 裕
(郷土史料館運営部長兼任)
運営事務局長：野口 靖彦
広報部長：高崎 尚康
広報部会理事：千々和 裕
郷土史料館理事：千々和 裕平
こやのせ座運営部長：柴田 泰助
こやのせ座運営部長：船川 勇一
監事：小河内勝次
監事：松尾千代子

第7回 こやのせ座芸術祭! 満員御礼



こやのせ座運営部会ならびに多くの皆様の献身的な協力に依って、四日間に亘る全ての企画が成功裏の内に執行叶いました事を慶びと致します。

有難うございました。

今回目新しきは、世界最大級の投資銀行であるゴールドマンサックスの要職を歴任し「田園からの産業革命」「日本列島快走論」など日本金融・経済改革の斬新なアイデアの提言者として知られる経済評論家：山崎養世氏にヒョんな経緯から【筑前木屋瀬八幡伝説：伊藤小左衛門】に手弁当で特別参加出演戴きましたが、世界経済界の第一線で活躍して来られた方の興味深く面白く格調高い講話を伺えたと思ひます。

又、今回特筆すべきは【木屋瀬芸術祭】の基幹企画であり筑前六宿住民間交流のリーダーシップを務める【筑前六宿フォーラム】に於ける数年来の懸案であり、昨年の提案を受け昨年七月に発会した筑前六宿住民が結成する【長崎街道筑前六宿開通四〇〇周年準備委員会】(世話人代表：梅本静一・世話人：六宿代表者・事務局：柴田泰助他)の主催で「白象くんがやって来た」公演を筑前六宿開通四〇〇周年に向けた第二回プレ・イベントとして来たる九月二日飯塚宿の嘉穂劇場で挙行する運びとなりました。

回を重ねること七回目にして筑前六宿住民間交流が大きな飛躍を遂げた事を報告申し上げます。と同時に【こやのせ座運営部会】の活動の場も木屋瀬のみならず筑前六宿へと大きく広がります。

更にもう一つ、今回の【木屋瀬芸術祭】でプロジャズミュージシャンとのセッションで初デビューした【こやのせ・座・プラスバンド】の母体、木屋瀬中学校の吹奏楽部が六月五日の福岡県大会で見事優勝を果たしました。僅か結成二年目での快挙の要因、即ち子供たちと指導者との信頼感からなる情熱と努力の成果に深い感動を覚え、今後の九州大会・全国大会での健闘に心からのエールを送ります。

尚【こやのせ・座・プラスバンド】とのセッションに参加したトランペッター黄 啓傑氏の属するブラックボトムフルメンバー七名を招いての【こやのせ・座・ジャズナイト】を八月二四日に企画して居りますのでご期待下さい。もちろん【こやのせ・座・プラスバンド】も出演します。

以上、第7回木屋瀬芸術祭と其れに関わる報告でした。

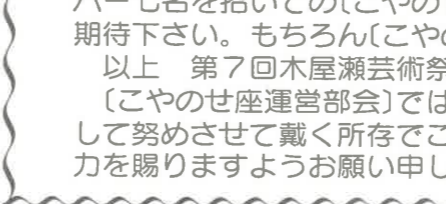
【こやのせ座運営部会】では、今後も【本物志向の継続性】と【自主企画・自主運営】を信条として努めさせて戴く所存でございますので、地域の皆様には、何卒、温かい心で末永くご協力を賜りますようお願い申し上げます。

こやのせ座運営部会長 柴田泰助



木屋瀬まちなみ水彩画展の報告
平成20年4月5日(土)～5月18日(日)まで、みちの郷土史料館第30回企画展「木屋瀬まちなみ水彩画展」が開催され、中町在住の中村慶一さんによる水彩画40点を展示しました。今では見ることのできない建物や史跡も、彩り豊かに描かれており、地域の皆様から好評を頂きました。

期間中の来館者は932人でした。ご来館ありがとうございました。



みちの郷土史料館第31回企画展
「木屋瀬と石炭」展 平成20年7月19日(土)～8月31日(日)

木屋瀬では、江戸時代には石炭が日常的に用いられ、明治時代以降は炭坑景観でにぎわい、石炭産業が旧木屋瀬町の発展を支えてきましたが、昭和38年の閉山から45年たち、今ではその記憶が失われつつあります。

日本の近代化に貢献した、地域の炭鉱遺産を再認識し、次の世代に伝えるために、炭坑についての資料を収集し、木屋瀬と石炭のかかわりについて紹介します。

お見逃しなく!

木屋瀬宿記念館の利用状況
平成19年4月～平成20年3月までの利用者数は、みちの郷土史料館及びこやのせ座(記念館を含む)併せて約24,000人の方々に利用して頂きました。今後も、楽しく面白い企画を予定しております。皆様の来館を心からお待ちしております。

シリーズ 筑前木屋瀬宿神仏めぐり 第十三回 「金刀平宮」を訪ねて...

「こんびら船々 追い手に帆かけて シュラシユシユ」この歌は、江戸末期頃から、讃岐の金毘羅さん参りに憧れて歌い始められた民謡です。金毘羅さんは全国に二千社以上あります。御本社は香川県琴平町に鎮座される金刀比羅宮ですが、琴平宮、金毘羅宮、金刀平宮とも称されています。

海の守り神として、漁業や船の関係者に篤く信仰され、こんびらさんと呼ばれて親しまれてきました。「こんびら」とは、日本語として不思議な響きですが、元はサンスクリット語で、インドの川の神の名前で、仏法の守護神として伝わりましたが、明治の神仏分離令で「金刀比羅宮」と改称しました。木屋瀬の「金刀平宮」は、長崎街道記念館裏の土手の大銀杏を少し下った扇天満宮の社殿に向って左手の社です。木屋瀬は川の港として室町時代に形成された町ですが、特に江戸末期から明治にかけて、川船による石炭輸送で大変な好景気に沸きました。明治十九年の調査によると、船業者は百十一所帯五百二十二人と町誌に記され、町内は三分の一以上の人が水運の関係者でありました。周辺には二千艘の船があったと伝えられています。

船は、底が浅く幅が広い船で、川船 平駄 五平太船 と呼ばれていました。一艘で米なら百俵、石炭は六トン以上積載していました。若い男達は、「船頭にならん」と嫁の来てがないぞ」と言われるぐらい船頭の収入は良かったのです。しかし、船頭は板子一枚下は地獄と言われるように大変危険な職業でもありました。その船頭達が川船輸送の安全と繁栄を願う木屋瀬の地に「金刀平宮」を勧請したのでした。玉垣には、明治二十三年四月の銘が、灯籠、鳥居には



船頭衆が寄進した銅馬 昭和17年4月 撮影

川霧や五平太船の浮き沈み 虹たつや帆を満杯の川船

本町 野口靖彦

「明治三十一年、木屋瀬船業中」で奉納の刻印が微かに読み取れます。社額には「金刀平宮」と記されています。扇天満宮が正六年の遠賀川土手の改修の折に現在の場所に移転したの現在、川船船頭は大変な賑わいがあったとされています。川船船頭は、鎮座された川船船頭は、信仰心が篤く、遠賀川河口の芦屋の岡湊神社や植木の天満宮、飯塚の皇祖神社等、各地の神社に、神具、鳥居、灯籠を数多く奉納してあります。木屋瀬の船頭衆は、「木屋瀬の大仲間」と称し、氏神様である須賀神社に銅馬一頭と参籠殿を寄進しています。銅馬は第二次大戦で軍費として供出されました。今は石の土台のみが残っています。参籠殿は当時のまま残っており、木屋瀬の町民は船頭衆のご縁に今も預っています。川船による石炭輸送は、明治二十四年筑豊鉄道が直方まで完成してからは徐々に鉄道に代わられ、昭和の始め頃には川船による輸送は絶え、五平太船も船頭も遠賀川から消えてしまいました。流域各地に船頭衆が勧請した神々も祭祀を行なう人が居なくなりました。次第に忘れられ、祠や奉納物に残された文字のみが当時の事を語ってくれます。「歴史とは何か、それは現在と過去の間の尽きること知らぬ対話である」との言葉があります。私は五月の連休中「金刀平宮」の前で、木屋瀬のご先祖の方々としばしば会話を交えました。

長崎街道木屋瀬宿に休泊した大名や長崎奉行 其の四

前号で嘉永元年八月に、木屋瀬宿に到着した長崎奉行稲葉出羽守一行百四十一人は、九州一円の名門の参勤交代の人数に比べてかなり少ないが、幕府は十萬石の大名の格式で長崎を下向させていたのである。

長崎奉行は、幕府直轄領であり長崎一帯の防備をつかさどるだけでなく、九州全部の大名を監視する役目も負っていた。

九州には、薩摩の島津藩や黒田・鍋島・細川等の外様大名に対して、幕府の武威と権威を示す必要が最優先であるから、長崎奉行の行列には幕府の命令で格式をもたせ、長崎下向の際にはその費用として、引越し押領金として千両を与えていた。

さて、長崎奉行の稲葉出羽守が木屋瀬宿に到着する以前に、先触れとして奉行一行の宿泊や宿割等の準備万端に遺漏がないように手配するために、芥前信兵衛が家来十人と荷駄を運ぶ人足四十二人馬十一匹が着いた。その中には荷駄頭領一人足付付き添って指図する者の足軽、最下級の武士の五人も含まれていた。

「御下向宿割帳」による本陣附近には、家老加藤壯大夫以下十人、用人江川保右衛門以下六人、用人和田東右衛門以下六人と書かれて、荷駄も具足箱・長持・両掛・合羽籠等々となっている。

前号に書いたように、遠国奉行である長崎奉行は、寛永十五年(一六三八年)以降は幕府の老中支配に属し、千五百石から三千石取りで幕府の役方を勤めた旗本が任命された。奉行所に勤める部下として、与力(奉行に属し同心を指揮し庶務を司る)五騎と同心(与力の下にあつて警務事務などに当たった)下級武士二十人が配下として預けられた。

稲葉出羽守と本陣に入った家老と二人の用人(稲葉家の財務を預かり内外の雑務を司る)に続いて記されているのが、給人(奉行の家臣で知行地を与えられた武士千葉彦之丞・木村隆助・狩野大輔である。以上の三人はそれぞれ四人



木屋瀬みちの郷土史保存会 松尾 良美

の家来を連れており、具足箱(鎧など)を荷籠籠籠籠・両掛・合羽籠等と馬の両脇に荷物を取り分けて布団を敷いて一人一名を乗せる乗掛馬三匹で到着している。

奉行の身辺に仕える近習として、加藤猪之助・金丸大吉・枝野浪吉・山田寛三・田谷謙之助・松島篤司の六人と小姓(奉行の身の回り雑用を勤める者)松原邦藏・岩瀬順作・中根徳藏・金井泰助・伊藤源藏・松葉源太等の名前が書き連ねられている。

この「宿割帳」には、武士以外に次のような職名と氏名が記載されていた。医師・柳原素道と従者、右筆方(文章・記録の執筆)作感 井上仲外二人、勝手方下役奉行所の会計等を司る後岡田儀三郎外二人である。

最後に氏名がなく、一坊主式人・料理人老人と書いてあった。江戸より長崎まで数日間の旅道中なので、一行の中に不幸事に備えての僧侶かと思われた坊主であった。坊主は坊主でも、僧侶でなく茶坊主である。

長崎奉行連の本陣での休泊の時に、来客の接待や茶事を司る役目を担う刺髪した人達がお供として加わっているわけだ。

料理人は、旅道中の奉行や大名の食事の調理を本陣内で食材を調達して、料理を出す自身賄いを行なった。また、本陣詰りと言つて、本陣守の亭主(本陣を預かる主人)の方で調理して食事を出すこともあった。

いずれにしても、大人数で様々な身分と職務を持った二行が、数十日を要する旅することは大変な苦勞や莫大な経費が嵩むことだった痛感した次第である。

木屋瀬宿場踊り(盆踊り)

木連上人が、盆の十六日に地獄の釜があきこの日だけ罪人達が開放される事を喜び、蓮の葉を頂いて狂ったように踊りまわった。地獄の仏の最良の日を喜び踊ったこの踊りを、盆踊りの初まりと言ふ。

一辺上人が念仏三昧の夢心地の中で、その念仏の調べに乗せられてか上人の身体が自然に動き始めた。この姿が段々踊りのように見えて来たので念仏踊りと言われ、盆踊りの初まりと言われている。

仏と僧の心の通いにより自然に生まれたこの二つの踊りが、盆踊りの初まりと考えられた。こうした事も盆踊りは、盆の仏を供養する大事な行事となった。

「福岡県民俗無形文化財筑前木屋瀬宿場踊り」この踊りは三百年も前から木屋瀬町部に踊り継がれている盆踊りである。木屋瀬のように古い歴史をもつ町や村ではこうした芸能を保有している所がある。けれど殆どその起源は明らかではなく、ただ自然発生したもののような考え方で大事に守り育てているようである。このように木屋瀬の宿場踊りも遠い昔から時々の数奇者達によって、大事に守られて来られて今日に至ったものであると考えられ、このもの

か誰のものとかではなくて無形の芸能であり無形の文化財であるために、踊りを大事に保存しなければならぬという数奇者達の心の集まりがなくてはならない。これがなくては無形の大家踊りを有形に表現する事は出来なくなる。

木屋瀬の宿場踊り(盆踊り)には、本手、ミヤコ、並手の三つの踊りがある。「本手」は伊勢音頭より生まれたと言われ、お座敷踊りであると見られているほどに静かなむすかしい踊りである。けれども三味線と太鼓に乗った歌の心には...



わたしの昔話

こよひの月は見へつかくれつ面白や

と一年一度逢えるという七夕さまの恋心を歌い踊る心も、それぞれの想いに夢に酔い舞いでか、女らしく美しい振舞いである。「ミヤコ」は次郎左という人が残した踊りであり、師の名を踊りの名とし「ジロサ」と呼んでいた踊りである。鶴が翼を大きく広げて、友を求めて舞いつづける姿を踊りに現したものと

「世の中の恋はさまざま、あるが中にも七夕の秋まらわびて一夜のらぎりなりつきせよ、まきぎぬや」

と一年一度逢えるという七夕さまの恋心を歌い踊る心も、それぞれの想いに夢に酔い舞いでか、女らしく美しい振舞いである。「ミヤコ」は次郎左という人が残した踊りであり、師の名を踊りの名とし「ジロサ」と呼んでいた踊りである。鶴が翼を大きく広げて、友を求めて舞いつづける姿を踊りに現したものと

扇天満宮学神祭

扇天満宮は、御祭神として菅原道真公が祭られており、約六百五十年前の歴史書(観心神事帳)に記されている大変古い鎮座のお宮です。

この学神祭は、道真公が書道の達人であった事になり、また梅が好きであったことから毎年新生の男子は「うし」、女子は「うめ」の習字を奉納し学業上達を祈願するものであります。今年も五月二十五日、晴天の日曜日に新緑の扇天満宮において、午後四時から神事が行われました。



新生一年生二十四名はそろいの法被を着て、神前に正座をし神妙に柏手をうつ姿は誠に微笑ましく、参列された父兄から健やかに育ってほしいと願う気持ちが伝わってきました。

踊りは見物客の中を移動し始めた。「木屋瀬のみなさんも、この踊りもなつかしくなりませんか」と婦人は群衆に巻かれながら別れの手を振りつつけられた。年中いろいろの席でも踊られるこの踊りが木屋瀬を遠くく嫁いでいる人の心に明るく生きていた。木屋瀬を遠く離れて老いている人の心にも懐かしく生きていた。

柴田豊廣遺稿集より

本町町内会長 千々和 啓治